

ズブズブ班

ラオス・ビエンチャン平野における世帯と生業複合の変化：視点と課題

池口明子（名古屋産業大学）

キーワード：世帯 水産資源利用 ビエンチャン平野 ラオス

Study of resource-use dynamics through household survey in Vientiane Plain
: Prospects and research questions

Akiko IKEGUCHI (Nagoya Sangyo University)

Key words: household, resource-use, Vientiane Plain, Laos

要旨

本稿では、2005 年度におこなった村落世帯悉皆調査について、その研究視点と方法、今後の課題を述べた。近年、自然環境の利用の変化を分析する方法として、世帯調査の重要性が増している。とくに、世帯を均一な社会単位としてではなく、年齢・性やその文化的理解の構成を捉える視点が重要視されつつある。今後の課題として、本調査をもとに多様な資源利用の実態を把握し、その世帯経済におけるその位置づけや世帯差を明らかにすること、そのうえで、2006 年度の資源利用活動調査を進めることをあげた。

1. はじめに

コラート平原最北部に位置するビエンチャン平野は、ラオス国内では面積に限られる平野部農村地帯であり、比較的生産力の高い水田地帯である。これら水田の合間にみられる森林や、季節によって面積を大きく変化させる湿地は、様々な生物資源の利用による生業複合を可能としている。一方、この地域はラオスの首位都市であるビエンチャン市に薪や食料を供給する後背地であり、近代化が進むタイと接する国境地帯でもある。多様な資源利用のあり方は、こうしたビエンチャン平野の位置づけに大きな影響を受ける。

モンスーンアジアの地域生態史を、とくにここ 50 年について明らかにしようとする本プロジェクトにおいて、生業複合の変化は 1 つの主要な研究テーマである。この変化は、歴史変化と民族史、個体史（Life history）、循環型の生業サイクルと季節変化などの組み合わせとして考えることができる [秋道 2004:6]。本稿では、これらの課題のうち個体史や季節ごとの生業サイクルの解明に関わる世帯調査の意義と方法について整理することを目的とする。以下、まず初めに文化生態論における世帯調査の位置づけについて研究動向を簡単に述べる。次にビエンチャン平野における研究視点の可能性と課題を検討する。最後に、2005 年度にビエンチャン平野のドンクワイ村においてズブズブ班が実施した世帯悉皆調査のデザインと、今後の課題を述べる。

2. 生業複合の変化と「世帯」

自然環境と人間の相互の働きかけをテーマとする文化生態論では、世帯レベルの研究が古くから重視されてきた。集約的農業の経営を分析した Netting[1993] は、その経営主体である家族は、構成や機能に文化間の差はあるものの、中心となる活動には次のような共通点があるとした。世帯はある組み合わせの生産、分配（貯金や共有、交換、消費を含む）、伝達（信頼や世代間の資産の譲渡）、生物的社会的再生産、共住（建築、維持、住むことに関わる活動）などに関わっている。また家族の構成員には性別、年齢や世代、血縁関係の文化的理解に依拠しつつ、農業や家畜の世話、水汲みや薪とりといった様々な仕事が生業複合されている。したがって、ある世帯メン

バーの活動の変化は、特定の自然資源利用や資源分布に変化をもたらす一方で、特定の生業活動や自然資源の存在あるいは喪失が、世帯内の分業や活動パターンに影響をもたらす。その相互関係は、同様の自然環境においてある程度文化的規範を共有する集団内部の生業の差異をみることで、理解することが可能である。

自然環境の変化のプロセスを、それをもたらす生業の変化および家族の変異から明らかにしようという試みは1960年代からおこなわれてきたが、1980年代からはますます世帯レベルの分析が重要視されるようになってきた。Zimmerer (2004) は熱帯雨林の変化や農業の集約化（あるいは粗放化）に関する世帯レベルの分析について次の研究動向を認めている。一つは、自然資源に関連した開発の政治・社会・経済的分析（例えば政治生態学）であり、一つは文化生態学や人類生態学でなされているような世帯レベルのミクロな経済分析である。後者では、世帯の人口学的特徴と分業、農業や自然資源利用の世帯差、活動の時空間などが詳細に分析される。さらにそれらの動態が、二次林の分布など自然環境の変化に及ぼす影響について、衛星写真等を組み合わせた分析も多くなされるようになってきている。近年では、政治生態学が対象としてきた、より広域な社会変化を視野に入れるための視点や枠組みも議論されつつある。

例えば、現金収入のための森林生産物利用について、McSweeney(2004) は所有農地面積が小さい若い世帯で、親族との相互扶助が少ない世帯で木材を含む森林生産物への依存が強いことを示した。さらに複数年度にわたる追跡調査によって、世帯の採集行動の変化を検討している [McSweeney 2002]。Coomes (2000, 2001) も、木炭生産への依存の世帯差と世帯内外で利用可能な労働力との関係に注目し、二次林形成の動態について分析枠組みを提唱する。

より広域な社会変化の影響をみる視点は数多く検討されているが、その一つとして、農外就業への従事による生業複合の変化があげられる。Rigg (1998) は農外就業を、資本や技術をそれほど必要としない小規模商業や工芸、教育など技術がやや必要な賃金労働者、技術と資本が必要な大規模商業や企業経営などの3つに分けた。これらの仕事へのアクセスには、世帯収入や社会的ネットワーク等による世帯差や、ジェンダーによる個人差が生じる。こうした差異が、地域集団の生業複合、ひいては環境利用の変化に影響をもたらす可能性がある。稲作に従事する世帯メンバーの都市への移動によって、その世帯の水田が粗放化したり放棄されるといったプロセスがその例である [Preston 1989]。二つ目の視点として、農業生産物や自然資源の市場の影響がある。非木材林産物 (NTFP) 市場の成長が、山岳地域の生業活動に与える影響に代表されるように、市場と活動の相互関係については研究が蓄積されつつある [De Beer and McDermott 1996]。しかしこの枠組みも、生物資源ごとに異なる市場の性質や、生産・採集活動に関わる世帯内の分業の変化を明らかにすることによって初めて、動的な枠組みになると考えられる。第三に、子供や若年者の教育や遊び、労働の変化があげられる。世帯は生態知の蓄積と再生産の場であり、その知識は日々の生業活動を通じて子供達に習得される [Katz 1991]。公的な教育制度の導入は子供の日々の活動、生態知の発達に影響をおよぼす可能性があり、その結果世帯の生業活動を変化させる可能性がある。

以上のように近年の研究は、生業複合の変化の分析における世帯構成の差異への着目がますます重要となっていることを示している。こうした動向のなかで、世帯構成員を無差別に集計して経済行動を分析することに異議を唱え、家族の人口学的特徴の重要性を提示チャーターノフの小農経済理論があらためて評価されており、これを基盤に新たな環境利用モデルを構築しようとする試みもなされている [Perz and Walker 2002]。今後は、異なる自然環境と利用の歴史をもつ地域間での比較や、一定期間の追跡調査をもとにして、議論の土台として耐えうる枠組みを構築することが課題となっているといえる。

3. ラオス・ビエンチャン平野の生業複合と世帯

ラオスでは市場経済の導入にともない農外就業が活発化し、農村における人々の生活も複雑なプロセスにより変化している [Bouahom et al. 2004]。こうしたプロセスはいかに生業複合を変化させ、人々と自然環境の関係に影響を与えるのか。モンスーンアジア内部の地域差と共通性を明らかにし、この地域の生態史を考えるうえで、社会・自然環境において異なる村落での世帯調査は重要な役割を担っている。焼畑が主要な生業である山岳部では、NTFP への依存度の世帯差 [Yamada et al. 2004] や、村落内の経済格差の要因 [中辻 2005] などが村落の世帯調査をもとにして検討されている。また、南部の稲作地域では、水産物利用の世帯差に関する報告がなされている [Garaway 2005]。これらの研究では、世帯の階層わけ (wealth ranking) にもとづいて生計活動の世帯

差を分析したものが多く、世帯の人口学的構成や生業複合の組み合わせとの関連については未だ研究が少ない。こうした視点を組み込みつつ、ラオス国内の異なる地域における生業複合の実態と変化を実証的に明らかにすることは、地域間比較の方法を考えるうえでも重要だと考えられる。

ズブズブ班では、これらの地域と自然環境、および市場や政策との関係において異なるピエンチャン平野で予備調査をおこなううち、かなり多様で興味深い生業複合のあり方を目の当たりにしてきた。この地域では、1980年代後半から市場が多数成立し、ピエンチャン市内とその近郊に向けて生物資源が供給されている〔池口ほか 2005〕。それらはタケノコやキノコなどのNTFPに加えて多様な昆虫や水産資源が含まれている〔斉藤2005；野中2005〕。水田で得られる稲以外の生物、いってみれば「非稲水田産物：Non Rice Paddy Products」と呼べるカニやタニシ、小型の魚類や水生昆虫なども一般的な商品である〔野中・池口2005〕。さらに、いくつかの村では塩の生産が重要な食料源・収入源になっているし〔イサラー 2005〕、ピエンチャン市内の工場への通勤も活発化している〔西村・岡本 2005〕。稲作の集約化や近郊野菜栽培もいくつかの村落でなされているものの、生業はこれに限定されず、稲作に森林や湿地の利用を組み合わせることが、ピエンチャン近郊農村では一般である〔足達ほか 2005〕。果たして、一つの村落においてこれらの活動はどれだけの多様さをもっているのか。また、個々の世帯はその多様な活動をいかに組み合わせ、それを可能にしている技術や自然環境とはいかなるものなのか。こうした問題意識をもって、ズブズブ班では2005年の夏から、ピエンチャン平野の一村落、ドンクワイ村を対象として世帯悉皆調査を開始した。以下ではその経過と調査のデザインについて述べることにする。

4．ドンクワイ村における世帯悉皆調査のデザイン

1] 経過

- ・2005年6月 悉皆調査票の作成
- ・同8月～12月 ドンクワイ村263世帯を対象として、第一次調査を実施
- ・2006年1月 調査結果をデータベースに入力
- ・同2月 調査結果の点検と再調査が必要な項目の抽出
- ・同2月～3月 再調査の実施
- ・3月～現在 再調査結果をデータベースに入力中

これらの準備と実施は、ズブズブ班のメンバー11名とラオス国立農林業研究所（NAFRI）のスタッフ1名、および村人の協力によりおこなわれた。

2] 調査項目

本調査では、地域間・時代間の差異と共通性を考察することを視野にいれて、東北タイ・ドンデン村の調査〔福井 1988；口羽 1990〕で使用された悉皆調査票をベースとして調査票を作成した。これに予備調査の知見をもとにして、水産資源・森林資源・昆虫・塩・加工食品（魚醤など）の利用に関する項目などを追加した。調査項目は多数にわたるが、大きく分類すると以下の項目があげられる。

家族構成と移住経歴
 家と屋敷地の構成
 農地の構成と取得の経緯
 農業経営（稲作・家畜）
 野生生物資源の利用
 米の購入と消費
 家族構成員の現金収入と手段
 消費の構成と買い物行動範囲

以上の調査項目のうち、世帯構成や農地所有状況、稲作品種や収量、家畜や生物資源による収入、農外活動と収入等に関する項目は、森林農業班によるウドムサイ県ナモー郡アイ村の悉皆調査項目と共通しており、今後比

較することが可能である。

3] 予察と今後の課題

本調査の結果は現在データベースに入力中である。調査の過程では従来報告されていないような様々な自然利用がみられ、その変化のプロセスにも多くの新たな知見がもたらされつつある。ここでは、そのうち一つの世帯の事例に若干触れたい。

世帯Aの構成員は夫(52歳)・妻(46歳)と子供6人であり、子供のうち1人はタイ南部沿岸の漁船で出稼ぎ労働、もう1人は両親と住みながらピエンチャン市内で季節的な建築労働に従事している。タイへ行った息子は仕送りしないため、食事代は減ったが収入には寄与しない。ピエンチャン市にかよう息子はたまに食事代を出す。一家は12ライの農地と1ライの森林を所有し、雨季のみ天水田で稲作をおこなう。2004年11月に収穫した米は、2005年4月には食べつくしてしまうため、さまざまな活動によって米やその他の食料・医療費・衣類などを手に入れる。6月にはタケノコやキノコ、水かさの増えた湿地ではさで網や四手網で魚とりがおこなわれるが、これらに従事するのは主として妻と娘である。村内で商店を営む別世帯の農地で田植えを手伝え、いくらかの収入になる。子供達は水田でカニをとって、学校で使うノートや鉛筆を買う。水田やその水路では主として息子と夫により夜間にカエル釣りや釜によるエビ採集、ヤスによる魚とりがおこなわれる。雨季の終盤から稲刈り時期にかけては夫が近隣の成人男性と河川での刺し網や定置網で魚を採り、森林では子供たちがゴオロギを採集するが、このゴオロギを200匹集めれば1ムン(12kg)の米代になる。2月になると川が干上がり塩の生産が始まる。この塩は、世帯の重要な蛋白源になるパデック(魚醤)の材料になるし、隣村から来る農民が持ってくるキュウリやササゲなどの野菜と交換もできる。

これらの多様な生業活動は、毎年決まっておこなわれるわけではない。世帯構成の転換とともに変化するし、季節的な変動も大きい。降水量の変化や米の出来具合、野生生物の分布の変化などはとくに大きな影響を及ぼすと考えられる。また、世帯構成員の出稼ぎは、それがタイでの住み込みかピエンチャンへの通勤かによって消費と収入に違った形で影響を及ぼしている。子供らによるカニやゴオロギの採集は、世帯の生業活動の重要な一部であり、自然環境の知識がこれらの活動を通じていかに蓄積され、変化するのは興味深い課題である。

今後はこの調査結果をもとに、生業活動の組み合わせの類型を検討し、代表的な世帯について自然環境利用の活動を詳細に明らかにしていくことが必要であろう。その結果は、生業活動と自然環境が相互に与える影響をみるための指標となる生物の抽出やその生態の研究を進めるうえで役に立つと考える。さらに、移住のライフヒストリーや、村落の人口動態、森林と農地利用の経年変化について今後検討がすすめば、世帯調査で明らかにされる世帯と自然の生態学的な関係を歴史的な視点から位置づける展望が得られるだろう。

文献

秋道智彌 2004「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005」アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005. 2003年度報告書 総合地球環境学研究所研究プロジェクト4-2:5-12.

足達慶尚・宮川修一・SIVILAY, Sengdeane 2005「ピエンチャン市サイター郡の資源利用と農業生産の地理的分布」アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005. 2005年度報告書 総合地球環境学研究所研究プロジェクト4-2:345-358.

BOUAHOM, Bounthong., DOUANGSAVANH, Linkham., and RIGG, Jonathan. 2004. Building sustainable livelihoods in Laos: untangling farm from non-farm, progress from distress. *Geoforum* 35: 607-619.

COOMES, Oliver T. and BURT, Graeme J. 2001. Peasant charcoal production in the Peruvian Amazon: rainforest use and economic reliance. *Forest ecology and management* 140:39-50.

COOMES, Oliver T., GRIMARD, Franque., and BURT, Graeme J. 2000. Tropical forests and shifting cultivation: secondary forest fallow dynamics among traditional farmers of the Peruvian Amazon. *Ecological economics* 32:109-124.

- De BEER, Jenne H. and McDERMOTT, Melanie J. 1996. The economic value of non-timber forest products in southeast Asia. IUCN.
- Garaway, C. 2005. Fish, fishing and the rural poor. A case study of the household importance of small-scale fisheries in the Lao PDR. *Aquatic resources, culture and development* 1(2): 131-144.
- 福井捷朗 1988 『ドンデーン村 - 東北タイの農業生態』創文社
- 池口明子・斉藤暖生・足達慶尚・野中健一・西村雄一郎 2005 「ビエンチャン市サイタニー郡の市場における生物資源流通」 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005. 2005年度報告書 総合地球環境学研究所研究プロジェクト 4-2:359-369.
- イサラー・ヤーナターン 2005 「ラオスのサイタニー郡における聞き取り調査：村落形成・移住史と塩生産」 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005. 2005年度報告書 総合地球環境学研究所研究プロジェクト 4-2:370-371.
- KATZ, Cindi 1991. Sow what you know: the struggle for social reproduction in rural Sudan. *Annals of association of American geographers* 81(3): 488-514.
- 口羽益生編 1990 『ドンデーン村の伝統構造とその変容』創文社
- McSWEENEY, Kendra 2002. Who is "forest-dependent"? Capturing local variation in forest-product sale, eastern Honduras. *The professional geographer* 54: 158-174.
- McSWEENEY, Kendra 2004. Forest product sale as natural insurance: The effects of household characteristics and the nature of shock in eastern Honduras. *Society and natural resources* 17(1): 39-56.
- 中辻享 2005 「ラオス北部焼畑山村にみられる生計活動の世帯差 - 幹線道路沿いの一行政村を事例として - 」地理学評論 78(11): 688-709.
- NETTING, Robert McC. 1993. Smallholders, householders: farm families and the ecology of intensive, sustainable agriculture. Stanford University Press.
- 西村雄一郎・岡本耕平 2005 「ラオス農村住民の日常生活に対する時間地理学的分析」 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005. 2005年度報告書 総合地球環境学研究所研究プロジェクト 4-2:405-410.
- 野中健一 2005 「サイタニー郡における生業複合と資源利用の多様性」 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005. 2005年度報告書 総合地球環境学研究所研究プロジェクト 4-2:411-414.
- 野中健一・池口明子 2005 「ラオス平野部における小動物利用と生活空間」 2005年人文地理学会大会研究発表要旨 176-177.
- PERZ, Stephen G., and WALKER, Robert T 2002. Household life cycle and secondary forest cover among small farm colonists in the Amazon. *World Development* 30(6): 1009-1027.
- PRESTON, David 1989. Too busy to farm: under-utilisation of farm land in central Java. *Journal of development studies* 26: 43-57.
- RIGG, Jonathan 1998. Rural-urban interactions, agriculture and wealth: a southeast Asian perspective. *Progress in human geography* 22(4): 497-522.
- 斉藤暖生 2005 「ラオス・サイタニー郡における森林分類と食用植物・キノコ」 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005. 2005年度報告書 総合地球環境学研究所研究プロジェクト 4-2:392-395.
- YAMADA, Kenichiro, YANAGISAWA, Masayuki, KONO, Yasuyuki, and NAWATA, Eiji 2004. Use of natural biological resources and their roles in household food security in Northwest Laos. *Southeast Asian studies* 41(4): 426-443.
- ZIMMERER, Karl S. 2004. Cultural ecology: placing households in human-environment studies- the cases of tropical forest transitions and agrodiversity change. *Progress in human geography* 28(6): 795-806.

Abstract

This report described perspectives of recent literatures which employed household survey in study of natural resource-use change, and prospects for our household survey in Dongkwaay village, Vientiane Plain, Laos. Household survey with careful attention to demographic characteristic has played increasingly important role in study of cultural ecology. In Vientiane Plain, Laos, where use of various natural resource and non-farm activities are activated, such perspectives to household has much relevance in study of resource-use change. The questionnaire was developed from the format used in case studies in Thailand and mountainous region in Laos for comparison. Meanwhile, our questions were designed also to describe the variety of wild resource use.